

ヒラメ種苗量産試験 (要 約)

工藤 敏博・金田一拓志・横山 勝幸
吉田 秀雄・福田 慎作・五十嵐照明

将来、ヒラメの栽培漁業化を図る為に必要なヒラメ種苗量産技術の開発をめざすと共に、放流及び中間育成試験用の種苗生産試験を実施したので、概要を述べる。なお、詳細は「昭和59年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班）」を参照されたい。

結 果

1 種 苗 生 産

- (1) 受精卵が必要数得られなかったので、秋田県栽培漁業センターより受精卵2,632,000粒、岩手県栽培漁業センターよりふ化仔魚223,600尾を譲り受けて飼育に用いた。
- (2) 親魚をFRPの水槽からコンクリートの水槽に移したところ、受精卵が得られたが、飼育には用いなかった。
- (3) 27.5mmサイズ11,800尾、19.3mmサイズ27,500尾を取り上げたが、時期が遅れたため、放流用種苗とはせず、試験用、漁協配布用にした。

2 中 間 育 成

- (1) 前述の理由より、日裁協宮古事業場より譲り受けた稚魚（全長25.9mm）約45,000尾を中間育成して放流した。
- (2) 放流尾数は、72.3mmサイズ2,200尾、74.9mmサイズ6,900尾、104.4mmサイズ10,300尾で、全尾数に標識を装着した。

3 体 色 異 常

サイズ別の体色異常のタイプ別出現率の変化を調べたところ、有眼側の体色異常は成長と共に減少する傾向が見られ、無眼側は逆の傾向が見られた。